

わが母の肖像

はまみつを作
北島新平え



わが母の肖像

はま みつを＝作

北島新平＝え



913／わが母の肖像

はま みつを

理論社／1970年初版

196 P／23cm／菊判

わが母の肖像

定価六八〇円

一九七一年八月 第三刷 ©

作者 はま みつを

発行者 小宮山量平

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四
電話(二〇三)五七九一(代表)
振替東京 九五七三六

読者に

また、こんなに心にしみる本をつくるしあわせに、めぐりあいました。若い読者のためのこのシリーズを、ひとつひとつの作品とのめぐりあいをつうじて、たいせつに積みあげたいと願っている編集者にとって、このよるこびは、深く大きいのです。

日本の少年少女たちが、「おかあさん」という甘い呼びかけからぬけでるとき、そして母たちの庇護のころもをぬぎすでるとき、そこに、深い断絶がおとずれがちです。母たちの愛は、その向けどころを見失い、子どもたちは、大人のところで母を愛するてだてを見出せないのです。たがいの切ないときどきが、切断とすれちがいを深めるばかりなのです。そんなときに、少年少女たちにとって、ひ



とつのささえになるのは、めいめいのママやおかあさんの足どりに、《日本の母》の運命をみつめ、同時に、そのような母たちの心を《わが母》と感じとる目を、ホームドラマを見るのはちがう心の片すみに、ひっそりとはぐくむことだと思うのです。

知っておくれ 子どもらよ

おまえの母の その母の

何時の代からか日本の母たちが
噛みしめてきた奥歯の勁さを。

——これは、詩人・佐藤さち子さんの長い詩の一節で、わたしは、いつも愛誦しているのです。すべての母たちが、言葉すくなく訴えているこのつぶやきを、そっと知らせてくれるような作品を、わたしは、求めつづけておりました。いま、その願いは、やっとかなえられたような気がするのです。

(ジュニア・ライブラリー編集長小宮山量平)



わが母の肖像
もくじ

読者に

1	しょうがの手	7
2	みがきにしん	12
3	紙びな	17
4	赤のでんぶ	22
5	庭ぶろ	27
6	こすもす	32
7	よしきり	38
8	かるた	43



19	おじやま	109
18	バリカン	104
17	坂	96
16	雨	89
15	さぐりいも	83
14	桃	77
13	きじの味噌汁 みそしる	69
12	夜通道 よとおみち	63
11	みょうがとうどん	57
10	針うけ はり	53
9	かぼちゃ	49



30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
姫鏡台 ひめきやうだい	背中 ^{せなか} のうた	花輪 ^{はなわ}	齒 ^は	秋の菊	春祭り ^{はるまつ}	かまめし	柱時計 ^{はしらどけい}	土の鈴 ^{すず}	ひとりしずか	エルムはかなし
171	166	162	157	150	144	139	134	126	120	114



そうてい・さしえ

北島 きたじま

新平 しんぺい

33
種 たね

あとかき

193

32
夏によせる

180

31
花をわける

175





1 しょうがの手

私は、母の手をいちどもみにくく思ったことはありません。
なれど、いうのでしうか。

しかし、母は、人前ひとまえに出ることを、たいへんきらっておりました。

村に集会があつても、めったに出ようとはしませんでしたし、女学校時代の同級会つうちの通知つうちを手にした時でも、いっしゅん若やいだ顔をほころばせはするのですが、なにかとことわりをつけ、出かけることはしませんでした。

「たまには町へ行ったらいいに。」
と、私がいいますと、

「家がいちばんいいわやあ。」

と、あいてにしてくれないのです。

よその家へ遊びに行くこともなく、だからよそから遊びに来るでもなく、母はあのおくまったかやぶきの家で、ひとりごとをいったり、時どきは、女学生のような声で、歌などつぶやいたりしていたのです。

その母に、「しょうがさ」というあだながついていたことを、私は母がなくなってから知りました。

母は、若い時、急におそった関節リユーマチという病気で、手足がすっかりまがっていましたが、とくに手の指はひどく、ねじれたりそっくりかえったりで、どんなすばらしい彫刻家も考えつかないような形になっていました。

そのうえ、農家でしたから、手に土がしみこみ、ほんとにごぶごぶした、しょうがそっくりなのです。

なんともうまいあだなをつけたものです。

私は、小さな時から、そんな手を見てくらししてきましたので、べつになんとも思いませんでしたが、いちどでしたかバスでとなり町の母の里へ行った時など、お客さんの目がいつせいに、きちんとかさねられた母の手にあつまるのです。

私は、母の気持ちになつてあげられるほど大きくはなかったのですが、その時ふと、

——早く手袋がはめられる冬がこないかなあ。

と、思ったことをおぼえています。

無口で、他人の話はおろか、自分のことさえ口にしなかった母でしたので、手のことでどんなにつらい思いをされたか、聞くこともなく別れてしまいました。

それにしても、母はしょうがさと、かげであだなされていたことを、知っていたのでしょうか。



いいえ、私はぜったい、なんにも知らないでなくなったのだと思います。

あれは、いつのことでしたか。

おし入れのなかから、新聞紙につつんだ母の写真しゃしんをみつけ出したことがあります。

その、ほとんど赤くなった写真のなかで、はじめて母が、女学校時代バレー・ボールの選手であつたことを知りました。

九人の女学生が、ネットの前で両手を空にひろげ、ジャンプしている写真でした。

そのいちばん高く、そのいちばん大きく口をひらいているのが母でした。

手も足も、ほかのだれよりも、しなやかにのびています。

私が、その写真を母にみせると、母は、くくつと笑い、そしてその笑顔えがおのまま、いつまでもつくろいを続けたのです。

私はすっかりうれしくなつて、その写真をたんすの上にかざったりしました。

母がなくなつて、もう何年かすぎます。

もちろん、写真のことなど忘れていました。それをまた、おもいがけなくみることになりました。

そのころ、小さかつた妹いもうとも、ことしおよめにいくことになりました。

あまりおおくもない荷物にもつですので、茶箱ちやばこのそこに母の着物を入れていっただらということ、黒光りするたんすをあけたのです。

そこには、母の着物がきちんとたたまれました。

外に出あるくことのなかった母です、ほとんどがおよめに持ってきたままであります。私がいちどもみたことのない着物ばかりです。

形も色あいも、昔のものですから、今どきのむすめに、あいっありません。

それでも妹は、うれしそうに、たんすから一枚ずつとり出しては、茶箱にうつしました。

そして、いちばんその、赤い大きな花もようの着物をとりあげた時のこと、なかからすると、一枚の写真がすべり落ちたのです。

——あの、写真でした。

いぜんより、だいぶいろもさめてはおりましたが、母は、やっぱりいちばん高くはね、いちばん大きな口をあげ、笑っています。

いつ、あの写真が、こんなところにしまいこまれたのかわかりません。

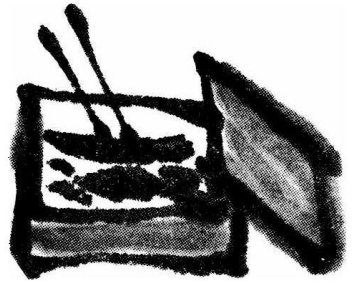
が、母はきつと、いちばんとくいな思い出を、いちばんはなやいだ着物にしのばせ、のこしておきたかったのでしょうか。

私はその写真を、こんど母のお仏壇ぶつだんに、いつまでもかざっておくことにきめました。

いつか、村の人たちがおまいりにきた時、

「あれ！」

と、いつて、おどろいてくれる顔を、母にいちどみせてやりたいと思うからです。



2 みがきにしん

なぜ「みがきにしん」というのかわかりませんでしたけれど、あれはにしんの頭と尾を切り取ってあるから、つまりからだの一部がかけているから「身欠きにしん」というのだそうです。

今でこそ、にしんなどといえば、かずのこほどでもないでしょうが、けっこうな値段で売られておりますが、私の小さかったころは、それほどでもなかったと思います。

と、いいますのも、私の育ったそれこそ山つきの村でも、時には口にすることもありましたが。

それはきまって、六月の田植えどきでした。土もうすく、水もつめたい山あいの田んぼでしたから、とても収穫はすくなくかったのですが、田植えだけはやはり、いちばんだいじなことで、どこの家でもお祝いしたものです。

田植えの日ともなりますと、女の人たちは朝四時ごろから起きだして、赤飯をたいたり、とうふ汁を作ったりで、それは目のまわるいそがしさでした。

なにしろ田植えの日には、朝こびる、夕こびるをふくめ、五回の食事をするのです。

ごま塩^{しお}むすび、きなこむすび、赤飯、ぼたもちと、なんでもすきなものをとって食べるのです。私の家は、父が戦場に行っておりましたから、働き手といえば、おばあちゃんと母の二人だけ、それも母は体が弱く、田仕事などできませんでしたから、じっさいにはおばあちゃんだけ、とても家だけで田植えをすますことはできません。

それで、私の家の田植えは近じよの人や、親せきの人に、ほとんどのんでやってもらっていました。

どこの家でも、いそがしいさかりです。その一日をさいての田植えですから、雨や風などやめることはできません。雨がざんざと降るなかでも、わらで作った「みの」をきて田植えをしたこともありました。

そんな時は、お茶も昼食も、じくじくと水のついたあぜに立ったままですませました。ほかほかとゆげの立っている赤飯も、手に持っていますと、たちまち雨にぬれ、せつかくにぎったおにぎりが、ぼろぼろとくずれてしまうのです。まるで、雨にひたして食べているようでした。

そんな日にしなくても、一日や二日^{ふっか}のばしたところで、どうということもないだろうにと、いまでは氣を樂^もに考えることもできるのですが、そのころは、人手もたりませんでしたし、なにかこう田植えというものは、むりやり天ととりくんではなければおさまらないような、かたくなものがありました。

それほどの田植えです。ですから、

「家のよめは、なにもできんで、皆のしゅう、よろしゅうたのみますじゃ。」

と、おばあちゃんはそのままをいったつもりでしょうが、私にはなにかせつない気持ちがありました。

そうしたことからか、田植えの日、母はつとめて明るくふるまっているように感じられました。あの無口な母が、村の人になにか話しかけ、しかも笑わせているのです。

私は、そんな時の母がきらいでした。

母は、田んぼへはいらなくても、お茶ばんと、ごはんをひきうけていればよかったのです。

それなのに、母は田んぼへ来ますと、ゆきばかまのすそを、みなとおなじにたくしあげ、あぜづたいに苗なえをはこんだりするのです。

母の足は、親指おやゆびと中指なかゆびがふじづるのようからまりあい、しかもあまり目にあてることもなかったせいか、てかてかとおちやわんのように白く目にしました。

いつもは、人前ひとまえに出ることすらきらっていた母なのに、平氣へいきで足をさらし、じょうだんをいつている母に、私はなんだかむしように腹がたち、

「おかあちゃん！ おかあちゃんはお茶ばんしていりやあいだ！」
と、つい強くいつてしまったものです。

母はその時、ふっと笑いとめ、いっしゅんにぶい光を目のふちにやどしましたが、すぐまたなんでもない顔つきにもどり前よりはしやいで、